

## 体型を考慮した和服の縫製方法（第3報）

仲村洋子、永野順子

### I はじめに

第1報<sup>1)</sup>ではスタンを用い、第2報<sup>2)</sup>は学生の協力を得て、私たちが考えている着やすい和服の縫製方法を究明してきた。それと同時に、この研究の目的が和服に親しみの少ない人にも、気軽に作れて気軽に着られることにある。この条件を満たすものとして学生に一応の了解を得て、平面構成学演習を利用して割り出し法による試着衣を縫製し、1年次で作った標準寸法による浴衣との着比較を試みている。

本研究に用いている「割り出し法」は最少限の器具により、比較的安易に採寸し、容易に計算できるように配慮して、私たちが想定したものである。これを平成元年から3年までの3年間にわたって、被服学科3年次の学生が縫製・着実実験を行なった結果を報告する。

学生は和服縫製の経験が浅い。1～2mmの誤差が重なりあうと、思わぬほど着心地に影響のすることがある。それにもまして、着心地は着方しだいという面を多く含んでいる。長い着実経験のあるものでも、その日の気分によって、一日中気持ちの悪い思いをすることがある。まして、その日初めて自分で和服を着たという学生も少なくない。同一の地質・同一の模様の浴衣を使用しての比較でもないし、一応、着実方法や比較条件は示唆するものの、その捕え方や理解度は千差万別である。こうしたものをデータとして採用することには、種々の問題があることを、充分承知のうえでこの実験を行なったのは、先にも述べたように「気軽に作れて気軽に着られる」きものを目指すには、通過しなければならない道筋と考えたからである。

### II 被験者の体型と和服の縫製経験

#### 1 被験者の体型

実験に参加した学生は平成元年より3年までの、各年度に本学被服学科3年次に在籍し、

服飾構成を専攻している97名である。その内訳は平成1年38名、2年34名、3年25名となっている。なお、3年は前期履修者のデータを利用している。採寸方法は2名を一組とし、ウエストラインを確認したうえで互いに測定しあう形を取った。その結果をすべて記載することは出来ないで、和服の丈と幅を左右する身長と腰囲の寸法の最大と最小を、各年度ごとに抽出して第1表に示した。

第1表 身長と腰囲の最大・最小寸法  
(単位はcm)

	平成元年度	平成2年度	平成3年度
最大身長	172.	167.4	168.
最小身長	148.	151.5	150.
最大腰囲	98.	110.	110.
最小腰囲	79.3	83.	84.6

この表だけで体格について断定するのは早計に過ぎるが、相対的に次のようなことを示唆している。

- 1) 平成元年度の学生は身長の差が大きい
- 2) これに対して腰囲の差が小さい。したがって、標準寸法の許容範囲にあるものが多いものと判断される
- 3) 平成元年度の学生と比較して、2～3年度の学生は体格が良いと言える。むしろ、肥満型のものがあることを示している

こうして得た寸法を割り出し法に基づいて、各自が仕立上がり寸法を算出した。その結果は平成元年度は、後幅に対して肩幅が広いため、袖つけ線の斜めを60cmまで下げて縫製したものがある。しかし、2～3年度はむしろ後幅が肩幅と同寸ないしは広いものが出てきた。こうした場合の処置は、肩幅を後幅と同寸にし、袖幅を狭めることによって、衿の寸法を調整した。今回は標準寸法によって縫製されたものとの比較を目的としているので、第2表に各部の割り出し法とともに仕立上がり標準寸法<sup>3)</sup>を記入した。なお、この表により、標準寸法にも体型による変化への対応が考慮されていることは明らかである。

## 2 被験者の縫製経験

今回、実験に参加した被服学科服飾構成専攻の学生の和服、殊に長着の縫製経験は浅い。大学では「大裁女物ひとえ長着」として、木綿仕立てを学習している。ここでは、標準寸法を基準として、各自の体格に合わせて是正したものである。その後、被服構成学や立体構成

第2表 各部の割り出し法および標準寸法

(単位はcm)

名称	割り出し法	標準寸法	名称	割り出し法	標準寸法
身丈	身長	身長と同寸	合裋幅	衿幅-1.5	13.5
着丈	実測 (尖椎より外踝まで)	—	衿下がり	実測 (肩中央から乳まで)	23.
衿	着丈× $\frac{1}{2}$ -2.~3.	63.~64.	衿下	身丈× $\frac{1}{2}$ +2.~4.	身丈× $\frac{1}{2}$
肩幅	衿-袖幅	31.	袖丈	身丈× $\frac{1}{2}$	50.
衿肩明き	頸付根囲× $\frac{1}{4}$	8.5~9.	袖つけ	腕付根囲× $\frac{1}{2}$ +2.~4.	23.
身八つ口	掌囲× $\frac{1}{2}$ +2.~4.	15.	袖口	掌囲× $\frac{1}{2}$	23.
前幅	腰囲× $1.5 \times \frac{1}{2} \times \frac{12}{35}$	23.	袖幅	衿× $\frac{1}{2}$ +1.内外	32.~33.
後幅	腰囲× $1.5 \times \frac{1}{2} \times \frac{15}{35}$	29.	衿幅	規定寸法	5.5
衿幅	腰囲× $1.5 \times \frac{1}{2} \times \frac{8}{35}$	15.	繰り越し	採寸部位(ニ-ホ×2)× $\frac{1}{3}$	2.

学演習等により、体型の把握に勉めているが、それにとまなう技術面は充分とは言い難い。ただ、高等学校においての習得程度は出身校や、教育課程の選び方によっても異なる。ちなみに、和服の製作にまで踏み込んで学習したと思われる被服科・家政科の出身者は、被験者のなかでは、平成元年度15.8%、2年度21%、3年度44%と年ごとに増加している。

### III 着装実験

試着衣の材料はこれまでと同じように、市販の格子縞を用いているが、布幅が不足した場合でも補正は行なっていない。これは一つには幅を広げるには、縞を使用していることから技術的な問題もあるが、実際に布幅を是正することはないし、身幅の不足は認められず、衿の不足は指摘するにとどめた。

縫製された試着衣と標準寸法による浴衣を交互に着装し、正面・背面および側面から写真撮影をし、着装時と写真による検討は被験者各自が行なっている。着装に際しては、どちらを先に着るかは個人の自由にまかせ、着つけるときの注意は前回同様5項目とし、原則的には本人自身が行なうものとした。

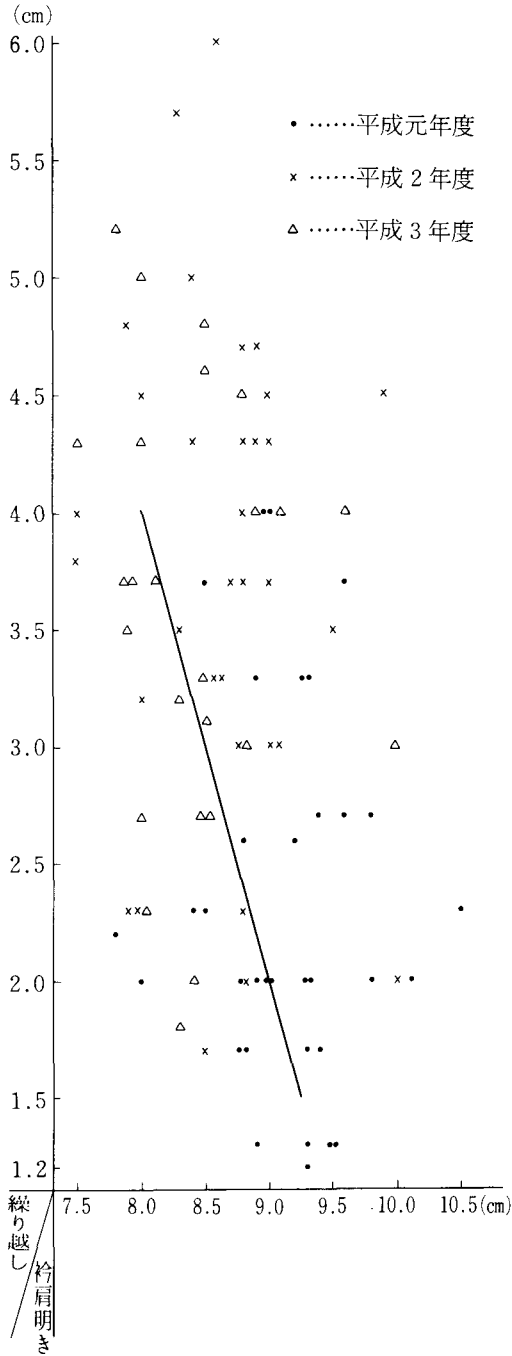
これらのレポートを整理し、着心地から「標準寸法のよいもの」・「試着衣のよいもの」・「どちらともいえないもの」の三つに分類し、調査・分析を試みた結果を第3表および第1図2図によって記述する。

今回の着装実験を通して、学生が和服の着心地を評価する場合、次の3点を基準としているようである。

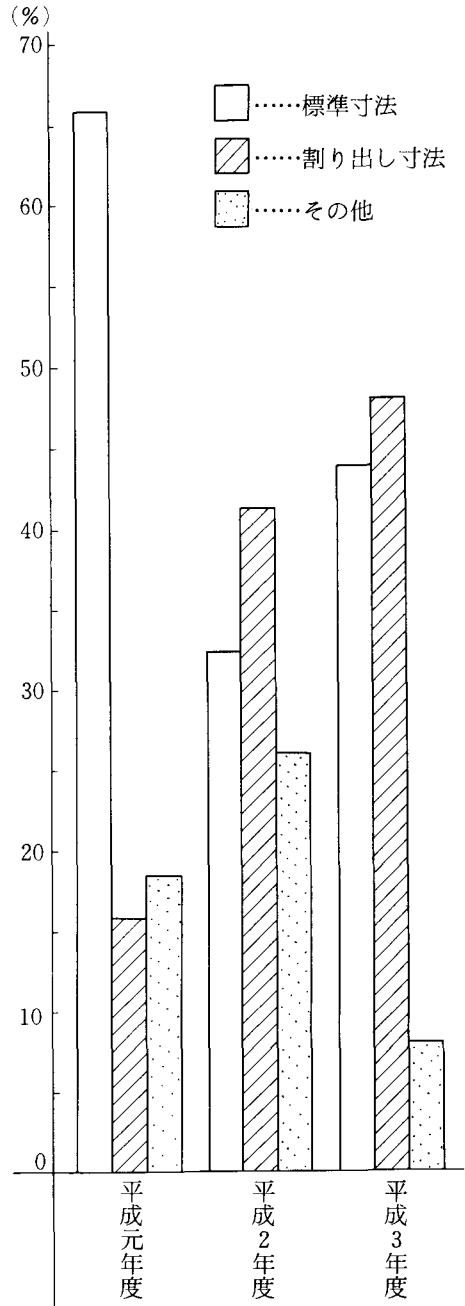
第3表 着装実験結果

(単位はcm)

平成元年度			平成2年度			平成3年度		
A	B	C	A	B	C	A	B	C
79.3	88.	85.5	84.	86.	83.	88.	90.2	84.6
84.9	93.	86.	84.	88.	83.1	88.	91.2	96.5
85.9	93.6	92.1	86.	89.	85.9	89.9	92.1	
85.9	94.9	93.	87.5	89.5	91.	89.9	93.	
85.9	96.	93.5	88.	91.5	91.2	89.9	93.	
86.	96.	97.	89.	92.1	91.2	90.	94.	
86.		98.	89.6	94.	91.2	90.	94.9	
86.5			89.9	94.	94.	91.2	95.5	
87.			89.9	94.1	96.	92.4	96.8	
87.			90.	94.8		94.	98.	
87.			91.2	96.5		94.	101.	
87.				97.1			110.	
88.				103.				
88.				110.				
88.								
89.								
90.								
90.								
90.								
92.								
93.								
93.								
93.								
95.2								
95.5								
38名			34名			25名		
25	6	7	11	14	9	11	12	2
100%			100%			100%		
65.8	15.8	18.4	32.4	41.2	26.5	44.0	48.0	8.0
〔備考〕掲載されている数字は腰囲を表す A……標準寸法で縫製した長着が着やすいと答えた者 B……割り出し寸法により縫製した長着が着やすいと答えた者 C……どちらともいえないと答えた者								



第1図 繰り越しと衿肩明きの関係



第2図 着装の実験結果

- 1) 下半身の身幅のゆとり
- 2) 衿回りの美しさ
- 3) 衿の過不足

そこで、この3点に注意を払いながら各年度の調査結果を踏まえ、少しずつ採寸方法を是正している。割り出し法に手をつけず、まず採寸方法の是正から始めたのは、採寸の仕方によって得られる数値が大きく変化するためである。いま一つはここで使用している割り出し法は、過去の多くの先駆者たちが試みた割り出し法を調査したうえで、想定したものであるから採寸ではカバーしきれないところを着実に把握したいためである。

#### 1 下半身の身幅のゆとり

第3表は腰囲に基準をおいて、その着心地について分類したものである。標準寸法の腰囲は90cmである。この表でA（標準寸法がよいもの）の腰囲は、平成元年度は79.3cmから95.5cmまでと非常に幅がある。つまり、身幅についてみれば標準寸法の許容量が大きいことを示している。相対的にみれば当然のことながら、腰囲が95cmを超えた場合は採寸によって割り出されたものが適しているといえる。逆に腰囲が小さいときは、採寸によって幅を狭めると身幅の不足を感じることが多い。すなわち、和服は前を深く交差させて着装するため、身幅にはゆとりが必要であるといえる。

一方、この表が示すように、標準寸法の許容範囲と目されるなかにも、B（試着衣の良いもの）、C（どちらとも言えないもの）が多く含まれている。これ等の内容を分析すると

- 1) 同じ腰囲でも、身幅が広すぎると感じる人と狭いという人がいる。同一人物で身幅が同寸でありながら、採寸によるものは狭いと感じる人もいる。これは着方によるものであろうが、こうした実験の難しさを端的に物語っている。
- 2) 衿の不足
- 3) 頸の回りの衿の表情
- 4) 前中央の衿交差位置

などが挙げられる。

標準寸法の腰囲の許容範囲を95cmくらいとすると、それを越えるものは3年度で約5人に1人で、その他は5～6人に過ぎない。そのためかもしれないが、元年度の学生は65.8%と標準寸法のをよしとしている。割り出し法の欠点について、衿が背面ではかぶり、側面では頸から離れて浮いたように見え、前中央の衿交差位置が下がり、三つ衿の直線が目立ち過ぎるという意見が圧倒的であった。これ等を総合すると繰り越し量の不足によるものと判断できる。

## 2 衿肩回りの美しさ

第1図は繰り越し量と衿肩明きとの関係を表わした図である。図のなかに引いた斜線は羽生京子<sup>4)</sup>の研究によって、衿肩明きを直線に明けた場合に妥当なものと認めたものである。すなわち、繰り越し2cmのときは衿肩明き9cm、3cmでは8.5cmとしている。この図で平成元年度を検討すると、まず繰り越し量の少ないものが目につく。いくら痩せ型の人でも繰り越しが2cm以下では、三つ衿がかぶったように見えて直線が目立つのはやもう得ない。

この結果を踏まえ、2年度は繰り越し量を決定する①(ウエストから背中心衿付線まで)を決める際、背中心衿付線は尖椎より4cm下がった所を通るものとみなし、元年度はウエストから尖椎までを①としてたものを4cm減じた寸法を用いることにした。その結果は第1図で示しているように、繰り越し量の少ないものは減少したが、極端に多い6cmのものまで現われた。実際に繰り越し量を指摘する学生が多くでた。

衿付線を尖椎より4cm下げたことは間違いだとは思われない。しかし、裁断の際三つ衿縫代1cmをひいて、衿肩明き位置を決めることは難しいと判断し、始めから縫代分を考慮して①をウエストから尖椎までの寸法より3cm減じて、3年度の学生に縫製させた。その結果は繰り越し量の少ないものへの影響はあまり現われず、多い方は1cm近い差が現われた。そして、学生からの繰り越し量に対する指摘は減少し、衿肩明きが大き過ぎることが問題提起されるようになった。これまでの実験によると繰り越し量が多くなれば、衿肩明き寸法は小さくすることが望ましい。第1図を分析する限り、年を追うごとに基準の斜線に沿う形になっているが、衿を美しく見せるためには、繰り越し量と衿肩明き寸法の関係はこれからも大きな課題として追究しなければならない。

## 3 衿の過不足

衿は布幅との関係もあり、洋服を着慣れた学生の感覚的なこともあって、何時も問題になる点である。実際、元年～2年度の学生が不足を指摘している。衿は着丈より割り出すことになっているので、着丈の採寸を尖椎より外踝とせず、床までの寸法とした。一つは測定のあいまいさを防ぐためと、いま一つは長着の場合、着丈が直接縫製に影響を及ぼすことがないためである。3年度の結果に衿不足を指摘するものが激減していることから、一応、解消したものとみなし、今後の様子を見守りたい。

## IV まとめ

種々模索しながら3年間に試みた着装実験の結果をまとめて報告した。その結果、第3表と第2図が示すように、割り出し法の改善がなされたことは明らかである。平成元年度には

試着衣が良いとしたものが15.8%に過ぎなかったが、3年度には48%と約半数にまで達したことは、実際に当たったことが有意義であったといえよう。殊に平成3年度に「どちらとも言えない」が減少したことは特筆すべきものとする。しかし、すべてよしとは言い難い。学生の多くが指摘している点を挙げると、

- 1) 衿肩明き寸法
- 2) 上半身の身幅が広すぎる
- 3) 袖つけ寸法の過不足
- 4) 前中央の衿交差位置が低い

などがある。今後は割り出し法の修正も含めて、より着やすい和服の究明を目指したい。

#### 文 献

- 1) 仲村洋子・永野順子：和洋女子大学紀要 30 家政系編 P. 103～111 1990
- 2) 仲村洋子・永野順子：和洋女子大学紀要 31 家政系編 P. 211～219 1991
- 3) 永野順子：平面構成学実習 I 衣生活研究会 1983 P. 49
- 4) 羽生京子：和洋女子大学紀要 28 家政系編 P. 83～92 1988

仲村 洋子 (本学専任講師)

永野 順子 (本学教授)